

「平和」の視点から人物を捉え直す

すべての人物について、生没年・出生地・経歴など基本情報を記載。「平和」の視点から人物像を捉え、斬新かつ今日的視点に立って記述。

あんどら

の退学処分となる。その後党の東京都委員などを務めるが、構造改革論を唱えて59年『現代の理論』創刊に参加、61年脱党した。62年統一社会主義同盟結成に参画し、社会党の江田三郎のブレーンの役割を担った。64年には復刊した『現代の理論』編集代表に就任し、左翼の理論家として活躍。77年江田らが離党して社会市民連合（後の社会民主連合）を結成すると政策委員長を務めた。

【著訳書】『日本の社会主義政党』全2巻（1974～76）、『戦後日本共産党私記』全2巻（1976～80）、『われらが青春』（1979）、『戦後左翼の四十年』（1987）、『日本社会党と社会民主主義』（1994）

安藤正楽 あんどら・せいがく

1866～1953（慶応2～昭和28）
地方政治家。伊予国（現・愛媛県）生まれ。明治法律学校（現・明治大学）で、国際法を学ぶ。帰郷後、1903年県議に当選。県が陸軍省による砲術演習場建設のために軍用道路の開設費を計上したことに反対、撤回を求め、反軍演説を行う。「軍直さず軍国主義を徹底せんが為此地区を撰定し、有事の日に之を用いんとするものにして」「真に県の利害を考え県民の福利を増進せんとして此案を出したりとせば、それは大に間違えり。パンを与えんとしてナイフを与うるにあらずや。吾人は切に熟考の上此案を撤回されんことを望む」。また、村民に請われ日露戦役記念碑の碑文を書いたが、その中で「世界人類の為に忠君愛国の四字を減するにあり」と記した。ほかにもある戦死者の墓に「徴兵の一大背理」「戦争の一大惨毒」と記した。10年警察に逮捕され、拘置。記念碑の碑文は、警察よって削り取られた。

- 【著訳書】山上次郎編著『人間讃歌非戦論者安藤正楽遺稿』（1983）
- 【参考】山上次郎『非戦論者安藤正楽の生涯』（1978）、山上次郎『安藤正楽人と芸術』（1985）、田中伸高『生と死の肖像』（1999）

安藤登志子 あんどら・としこ

1917～（大正6～）
社会運動家・反戦運動家。静岡県生まれ。大仁高小で藤田鳴鶴の「伊豆の踊子」執筆の経験がある。戦時中「湯本

館」に生まれ、少女時代を送る。宿に泊まっていた大塚金之助らと交流。父は大本教の信者で、実家は弾圧で警察に踏み込まれたことがある。女学校卒業後、川崎の東京電気無線（現・東芝）に就職。後に実家に連れ戻され、女将を務めた。その後三井銀行の金融経済研究所を経て日本石炭株式会社（後に配炭公団）で組合専従の活動家となる。戦後、映画のパンフレット作りを仕事とし、共産党ともかかわる。後に党中央を批判し、トロッキズムに近づく。石油化学新聞社勤務を経て、51歳で北富士演習場に反対する農民たちと出合い自らも闘争に参加する。70年「北富士闘争連絡会」を結成し、機関誌「北富士闘争」を発行。以後も反戦運動を続ける。

- 【著訳書】『北富士の女たち』（1982）、『草こそいのち』（1987）、『北富士・入会の火』（1991）
- 【参考】忍草母の会事務局『忍草母の会闘いの記録』（2003）

い

李仁夏 イ・インハ

1925～
在日韓国人キリスト者。朝鮮・咸鏡北道生まれ。15歳で日本に渡る。戦後カナダで神学を学び、牧師となる。神奈川県川崎市を拠点に福祉や人権の向上運動にかかわり、日本キリスト教協議会議長などを務めた。また「在日の戦後補償を求める会」代表を務め、在日韓国人旧日本軍傷痍軍属の戦後補償を求める運動を展開。社会福祉法人青丘社理事長。1998年度朝日社会福祉賞受賞。

【著訳書】『寄留の民の叫び』（1979）、『共に生きる新しい世界』（1987）、『戦後五十年の日本の国家を問う』（1995）、『いま、平和とは』（1996）

李修京 イ・スウギョン

1966～
社会学者。立命館大学博士課程修了。韓国・ソウル生まれ。運輸省（現・国土交通省）公認通訳から1997年立命館大学助手、2000年平和学、社会学担当講師になった。その後、山口県立大学助教授

【著訳書】は当該人物の主著や自伝など。
【参考文献】は伝記や評伝を中心とするその人物に関する研究書、およびその人物がかかわった事件・事象についての研究書などを掲載。

はじめての事典、ついに刊行!

刊行の言葉 鶴見俊輔

現代は煮つまってきている。前に『「現代日本」朝日人物事典』をつくったとき、その人の戦争中にいた場所をきいて、書き入れることを心がけたが、16年後の今は、この前の日本の仕掛けた戦争について体験を持つ人が少なく、おなじ方法をとることはできない。

平和については、敗戦にさかのぼって考えることでは足りない。明治はじめにさかのぼって考えることでも足りない。明治より前にさかのぼって考えることが必要である。

孤島に流れついた漂流者万次郎が、捕鯨船の船長ホイットフィールドに身振りですらせた言葉。腹がへっている、という意味。そこから出直さなくては、と思う。

明治以前の言葉は、横井小楠にしても、安藤昌益にしても、現代の日常の言葉に近い。そのころの子供や母親の使っていた言葉——これに加えて、腹がへるという現実が、今の世界にとって平和運動の基礎である。

明治から、日本は、欧米の学術用語から言葉を借りて、思想を語るようになった。残念ながらその習慣に平和運動が影響された。

その習慣を借りて、知識人は平和について語るようになり、それが今日まで続いている。こうして戦争は人殺しであるという事実を隠すようになった。

兄「戦争ごっこをやろう」
弟「うん、やろう」
兄「戦争はこわいぞ」
弟「なぜ」
兄「敵に殺される」
弟「じゃ、ほくは敵になろう」

これは、戦時下に、秋田実が集めていた漫才のネタの一部である。

ここから出発しようとしていた漫才師のネタモトが戦時にもいたが、その志は実らなかった。

その志を、九十年おくれて、日本文化に実らせたい。そのためには、平和運動の基礎を、欧米——今は米国——にゆだねることをやめ、日本人の日常の言葉から出直したい。その目的のために、『平和人物大事典』も、明治より早いところからはじめたい。

別に、戦時の自分の体験からはじめなくても、戦争は、見知らぬ人に命令され、見知らぬ人を殺すことである——そのことを学術用語に隠さず見極めることができるはずだ。

あくまでもこの事典はその新しい言葉づかいの入り口をつくることをめざす。

戦中に政府の出版した小冊子に、「戦争は文明の母」とあった。よくぞ言ったと思う。そうだとすれば、私たちは文明とまっすぐ向き合わなくてはならない。文明のエスカレーターに身をゆだねては、ふたたび、三たび、戦争に突き入ることを避けられない。

